

こたえ 絵仏師良秀^{りょうしゅう}はってん
発展 ②絵仏師良秀^{りょうしゅう}

(宇治拾遺物語)

これも今は昔のことですが、良秀^{りょうしゅう}という、仏の絵をかく絵師がいました。ある日、良秀^{りょうしゅう}の家となりから火事が起こり、火は、風にあおられて、良秀^{りょうしゅう}の家にもせまってきました。良秀^{りょうしゅう}は、あわてて外へにげ出しました。家の中には、たのまれてかいていた仏の絵や、着物を着る間もなかった妻や子どもが、まだ残っていました。けれども、良秀^{りょうしゅう}は、それにかまわず、道の向かい側に立って、燃える家をじっとながめていました。火が、良秀^{りょうしゅう}の家に燃え移り、ほのおが勢いよく上がり始めました。人々が見舞い^{みまい}にかけけると、良秀^{りょうしゅう}は、ときどきうなずいては、にやりと笑っています。

「なんということだ。気でもちがったのか。」

人々がたずねると、良秀^{りょうしゅう}は言いました。「気がちがってなどいるものか。わたしは、これまで、不動明王の背中のほのおを、うまくかけずにいた。今、本物のほのおが燃え上がるのを見て、ようやく、そのかき方が分かったのだ。これこそ、大もうけというものだ。」

その後、良秀^{りょうしゅう}がかいた不動明王のほのおの絵は、「よじり不動」とよばれ、人々から大いにほめられたということです。

仏

の絵

1

良秀^{りょうしゅう}は、何の絵をかく絵師でしたか。

2

家が燃えているとき、良秀^{りょうしゅう}はどうしていましたか。

イ

ア 家の中にもどって、絵を運び出した。

ウ 道の向かい側に立って、燃える家をながめていた。

火を消そうとした。

3

良秀^{りょうしゅう}が、燃える家を見て笑っていたのはどうしてですか。

本物のほのおを見て、不動明王のほのおのかき方が分かったから。

4

良秀^{りょうしゅう}は、どんな人物だと考えられますか。あなたの考えを書きましよう。

絵のことを何よりも大切に作る、芸術にとりつかれた人物。